

『分類俳句全集』と『大発句帳』の比較  
—歳旦・春の部について—  
A Comparative Study of “Bunrui haiku zenshu” and “Dai hokku cho”  
—for part of Saitan and Spring—

学籍番号：200921750

氏名：渡邊 有美

Yumi WATANABE

正岡子規は、近代の俳人の中で最も研究されているとあってよい。子規は、古俳書の中から俳諧の発句を取り出し、項目ごとに分類整理した。それは『分類俳句全集』（昭和3年、アルス刊、全12巻）として纏められている。彼が俳句革新運動をすすめる、優れた俳句を生み出していった背景には、その作業が大きく関係していると言われている。しかし『分類俳句全集』には、正岡子規本人の句や俳論は収録されておらず、子規の作品そのものではないためか、その研究は進められていない。本研究では俳諧の源である連歌の発句に焦点を当て、子規が『分類俳句全集』を編纂するにあたって連歌をどのように取り入れたか、その傾向について調査する。すなわち『分類俳句全集』の中から『大発句帳』及び個人の発句帳を出典とするとある発句を抜き出し、元の『大発句帳』と比較した。

その結果、『大発句帳』及び個人の発句帳を出典とした句は2785句あり、『分類俳句全集』の凡例で示されているように複数の分類に重複している句を除いた実数は2346句であることが分かった。そのうち『大発句帳』で確認できた句は2592句（実数は2190句）である。『大発句帳』には記載されていなかった句は193句（実数は156句）あったがそのほとんどは個人の発句帳が出典とされている句で、『大発句帳』から採ったと書かれているが確認できなかった句は総数実数ともに5句であった。

次に『大発句帳』から『分類俳句全集』に収録されていない未採録句については、319句あった。なるべく多くの句を収録するという方針であるにも関わらず、採られなかったのには何らかの意図があると思われる。この未採録句の内訳は175句が作者名の書かれている句、残りの144句は作者不明の句である。その数値は半数ずつであるが、それぞれの母数を考えると（前者は2245句、後者は213句）、『分類俳句全集』に収めるときには作者の判明している句を優先していたと思われる。

また『大発句帳』の記述と『分類俳句全集』の記述に差異が見られる句も多くあった。『大発句帳』の記述誤りについては近年の研究で明らかになっているが、子規もその通りに訂正している。出書名が個人の発句帳となっている句はそれを参照したと考えられるが、『大発句帳』が出典とされている句については、どの俳書を見て正しい表記を得たのかは分からない。最後に、『大発句帳』では冬部に収録されていた句が『分類俳句全集』では春の部に分類されていた例も1件見られた。

研究指導教員：綿抜 豊昭

副研究指導員：松本 浩一